

岡山医学会雑誌

第71巻11号の2 (第779号)

昭和34年10月30日発行

615.786-099

自殺の目的を以つて P, Z, C (Perphenazine) を 大量に服用した一症例

国立岩国病院精神科
難波英弘

〔昭和34年9月4日受稿〕

I. 緒言

最近、精神科領域に於ける薬物が、次々と発見され、仲々良い効果を挙げている。昭和33年には、P, Z, C が発売され、更に、斯界に多大の福音を与えているが、私は偶々、本薬剤を自殺の目的を以つて、多量に服用した患者に遭遇したので、ここに報告する。

II. 症例

22才、男、精神分裂病

家族歴： 実姉に精神薄弱者が1名いる。

現病歴： 高校卒業後、1ケ年、浪人して青山学院大学に入学したが、当時より、追跡念慮が出現し、自分でも、おかしいことだとは思いつつも、度々、振り返り乍ら、通学していた。2学期頃より、症状は、つり、確かに、自分のあとをつけて来る者が居るというので、通学の途中、バスに飛び乗り、電車に乗り、省線に乗りかえて、逃げ廻り、学校へ行けなくなつてしまつた。その後、約半年間は、全く学校へ行かず、東京都中を、ぐるぐる廻つては、下宿に帰つていた。終に、2年生に進級する頃、退学して郷里に帰つてしまつた。それから、殆んど外出せず、一室に閉じこもるようになった。帰郷後、約1ケ年半、つまり、発病以来、約2ケ年半を経過

して、当院を訪れた。

現症： 注察、被害、関係妄想。思考化声を有し、態度は、きこちなく、顔貌は仮面状で硬化していた。入院の上、電気、インシュリン、クロールプロマジン、レセルピン治療を施行したが効果なく、9ケ月を経過したところ、P, Z, C (Perphenazine) が、市販されるに及んだので、初日より1日量を12mgとして、連日、同量を投与した。症状は漸次、軽快し、約2ケ月間の投与にて、病識が出現し、完全に寛解したので、退院せしめた。このP, Z, C 投与中、何等、副作用の出現、乃至、一過性の症状の増悪は認められなかつた。退院後、本人は、病気の為、大学を中途退学したことを後悔し、自宅(岩国市)より、毎日、汽車にて広島市の某予備校に通学した。この通学と、日夜の勉強が禍いした為か、退院後、3ケ月目に、不安、不眠、食慾減退、離人症を訴え、再度、当院を訪れた。入院を、すすめたが、「P, Z, C を服用すれば良いだろうから、通院したい」と、いい張つた。私は、交通の不便を考慮して、本薬剤を近所の薬局にて購入するようにし、前回と同様、1日量を、12mgとして、毎日、服用するように指示した。4日目の午後3時頃、タオルにて頸を縛り、両手で顔をおさえて、突然、来院した。下顎、頸部は、極度に硬直し、且つ、後方に引きつり、苦悶状の顔貌を呈し、左口角は下垂し、流涎して、全

く発語出来ぬので、筆談を行なった。「自殺の目的にて、今朝8時に、P, Z, C 65錠を一度に服用した」と、語った。血圧 120 mm. 瞳孔異常なく、対光反応正常。腱反射正常。胸、腹部内臓に異常を認めず。脈搏は正常値にて、緊張良好。即ち、牙関緊急、流涎以外には、何等、変化を認めなかつた。私は、P, Z, C の副作用と判断して直ちに、リンゲルの滴点注入を行なった。約半量 (250 cc) 注入した辺りから、牙関緊急は取れたが、注入後、約10分間ばかりして、又、牙関緊急が現われた。一時は、以前と同じように発語も出来ず、多少、流涎する程迄に到つたが、多少づつ落ちつき、やがて、すやすやと、眠り出した。翌日は、すつかり、牙関緊急は取り去り楽になつた。しかし、離人症、不安等の分裂病症状は、その儘であつた。本人は、「自分は、再度、大学を受験しようとしたのに、再発したので、この世の中が、つくづく嫌になり、早朝、P, Z, C 65錠を一度に飲み、自殺を企てたが、間もなく眠むくなり、居ても立つても居れぬ位い、嗜眠性となり、ぱつたり倒れて眠むつてしまつた。そのうちに、顎が痛たくて耐まらなくなり覚醒した。又、鏡を見て、自分の顔貌の変つているのに驚ろいて、病院に来た」と、語つた。即ち、服薬より、約9時間を経て覚醒し、1人で支度をしてバスに乗り、病院に来た訳である。従つて、この間、服薬より約10時間を経過している。

参 考 文 献

- 1) 中川秀三他：治療，第41巻，503頁（昭和34年）。
- 2) 岡本重一他：診療，第11巻，第4号（昭和33年）。
- 3) 太田幸雄他：診療，第11巻，1083頁（昭和33年）。
- 4) 田原幸男：内科の領域，第6巻，360（昭和33年）。
- 5) 黒丸正四郎：新薬と臨床，第7巻，6号（昭和33年）。
- 6) 荒木督他：新薬と臨床，第7巻，9号（昭和33年）。
- 7) 河井清他：内科の領域，第7巻，1号21（1959）。

私は、本人の分裂病を治療するため、副作用が取れてより、2日目から、又、P, Z, C 12 mg を1日量として連日、投与したが、何等、副作用の再出現を見ることなく、離人症は順調に消失し、1週間にして寛解せしめることが出来た。

Ⅲ. 総括並びに考按

発病以来、約2ケ年半を経過した精神分裂病患者で、電気、インシュリン、クロールプロマジン、レセルピン治療を施行したが、効果なく、P, Z, C を投与して、初めて寛解した。しかし、3ヶ月目に再発して、厭世感を抱き、自殺の目的にて一度にP, Z, C 260 mg を服用した。これは深い睡眠と、次いで牙関緊急、多少の流涎とを経験したのみで、生命に異常はなかつた。この一度の大量投与では効果なく、本患者は、更に P, Z, C 12 mg を連日、服用することによつて、間もなく寛解することが出来た。

私は、P, Z, C は、諸家のいわれる如く、副作用の比較的軽いものであり、生命に対して、それ程、危険の多いものではないということ、一例に於いて認めることが出来た。又、こうした薬剤療法も出来るだけ入院の上、施行すべきであるということも、痛切に感じた。

A Case Report on a Young Student Taken a Large Dose of Perphenazine in an attempt at Suicide.

By

Hidehiro Namba

Department of Mental Diseases Iwakuni National Hospital Iwakuni, Japan

A male student, 22 years old:

Family history: He has a sister with mental weakness.

Symptoms: Schizophrenia of 2 years' duration.

He was treated with electric and insulin shocks, and with chlorpromazine and reserpin without avail. The administration of perphenazine (PZC) at last alleviated his symptoms. However, he had relapse three months later, and became so despondent of life that he took 260 mg PZC in one dose with an intention to commit suicide. This induced a deep sleep, followed by trismus and with a slight salivation, but no danger to his life. Such a large dose of PZC had no favorable effect on his symptoms. Yet, this patient improved soon afterward by daily administration of 12 mg PZC continuously.

In this one I have been able to recognize that PZC has a little side-effect and there is no great danger to life in its administration, as contented by many investigators.
